602

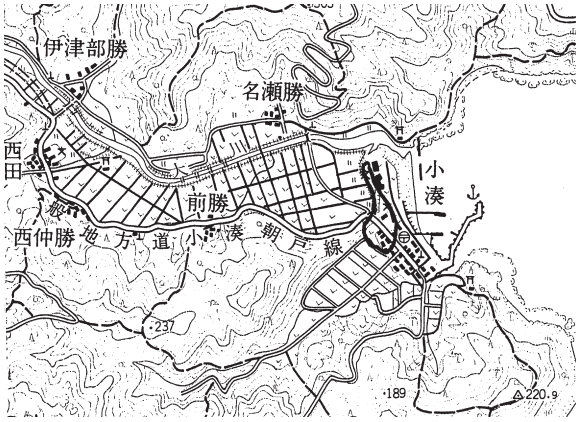
小湊（こみなと）フワガネク遺跡群

（鹿児島県名瀬市大字小湊字外金久）

位置と環境

太平洋に面している小湊集落は，南北に広がる海岸線に沿いながら，２列の海岸砂丘が認められる。当該砂丘列は，完新世における気候変化で生じた海面変動（海進海退）により形成されたものであると考えられる。現在の海岸部分に位置している砂丘列が新期砂丘，奥部に位置している砂丘列が古期砂丘に相当するものであると理解されるが，詳細は判然としない。

海岸部分に位置している砂丘は，奄美大島でも屈指の規模を誇る大型砂丘である。当該砂丘の北側部分は畑地，南側部分は集落として利用されている。小湊フワガネク遺跡群は，畑地部分に所在している。遺跡が広がる畑地一帯は，細かく分割された土地境界にソテツが古くから植栽されており，ソテツの大群落を形成している。シマウタ（奄美民謡）にも「ソテツぬキョラさや古見金久（ソテツが美しい小湊集落）」と謡われている。



第１図　小湊フワガネク遺跡群の位置

調査の経緯

1995（平成７）年４月，当該砂丘地に学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」が開校した。1997（平成９）年，同校が計画した拡張事業に際して，小湊フワガネク遺跡群が発見されたため，名瀬市教育委員会が確認調査を実施した結果，事業計画区域の一部からも遺跡が確認されたため，急遽，緊急発掘調査が実施されるところとなる（第一次調査，第二次調査）。

さらに当該遺跡の重要性を踏まえて，名瀬市教育

第２図　発掘調査箇所

写真１　ヤコウガイ貝殻集積（第二次調査）

写真２　ヤコウガイ貝殻破片集積（第二次調査）

写真３　ヤコウガイ製貝匙製作跡（第一次調査）

委員会は，遺跡の保護保存を目的とした遺跡範囲確認の発掘調査を2000（平成12）年から実施している。その結果，小湊フワガネク遺跡群に隣接する字長金久，字下金久の一帯からも遺跡が確認され，当該砂丘一帯に遺跡が分布している様子が明らかにされた。遺跡面積は，フワガネク（外金久）地区，ナガガネク（長金久）地区，サガリガネク（下金久）地区の３箇所を合わせて約25,000㎡に達している。

遺構と遺物

1997（平成９）年の発掘調査（第一次調査，第二次調査）では，７世紀前後に位置づけられる掘立柱建物跡（４棟），貝匙製作跡（５箇所）等の遺構をはじめとして，兼久式土器（約8,000点），ヤコウガイ貝殻（約3,000点），ヤコウガイ製貝匙（約90点），イモガイ製貝札（16点），鉄器（８点），礫（約3,000点，石器を含んでいる）等の多数の出土遺物が発見されている。現段階で，当該遺跡に関する中核を成す資料群である。

掘立柱建物跡は，４棟とも第二次調査地点から確認されたもので，いずれも長方形を呈しており，４

m×２m前後の共通した規模が認められる。

貝匙製作跡は，第一次調査地点から２箇所，第二次調査地点から３箇所確認されている。おびただしい数のヤコウガイ貝殻が集積されたり，破片が集中して出土するが，製作途上段階のヤコウガイ製貝匙が一緒に出土して，貝殻破片の割れ方には著しく高い共通性が認められることから，そうしたヤコウガイ貝殻の集中出土箇所は貝匙製作にかかわる作業跡と理解できる。

第一次調査地点，第二次調査地点における出土土器は，「兼久式土器」と呼ばれている奄美諸島特有の在地土器に相当する。器種構成は，甕形土器と壺形土器からなり，有文土器と無文土器が認められる。有文土器は，文様の特徴から２大別できる。第１類土器は口縁部に沈線文のみ施すものである。第２類土器は，口縁部下（もしくは頸部）に刻目を施した隆帯を１～２条巡らせて，口縁部のみか隆帯を挟んで口縁部・胴部に沈線文を施すものである。第１類土器と第２類土器の双方とも，口唇部に刻目を施しているものが多数認められる。また第二次調査地点において，土師器模倣土器が１点出土している。

イモガイ製貝札は，第一次調査地点から６点，第二次調査地点から24点の合計30点が出土している。いわゆる「広田遺跡上層型貝札」の範疇に含まれるものであるが，すべて兼久式土器に共伴している。貝札の出土箇所は，貝匙製作跡と重複する傾向が認められる。第一次調査，第二次調査における双方の出土資料を比較してみると，文様意匠の共通性は認められるが，文様構成が若干相違している。

水洗作業が十分進められていないため，石器については判然としないが，研磨痕や敲打痕が残されている大小の石器が貝匙製作跡の周辺部分から多数出土している。貝匙製作と関連して使用されていた可能性が高いと考えられる。

それから若干の鉄器が出土している。第一次調査地点から５点，第二次調査地点から13点が出土しているが，いずれも破片である上に錆で膨らんでいるため，器種を特定することは難しい。

そのほか食料残滓と考えられる自然遺物（貝殻・獣骨等）も多数出土している。

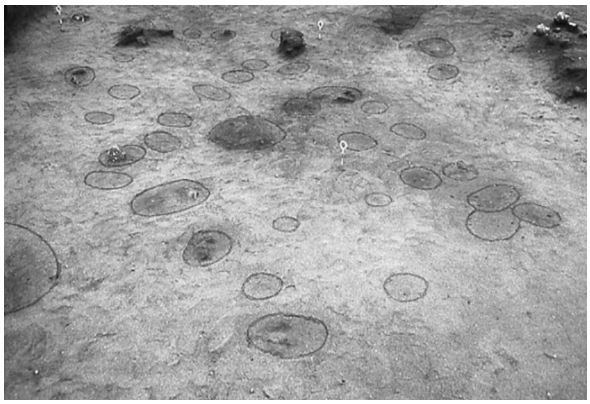


写真４　掘立柱建物跡（第二次調査）

写真６　土器（第二次調査）

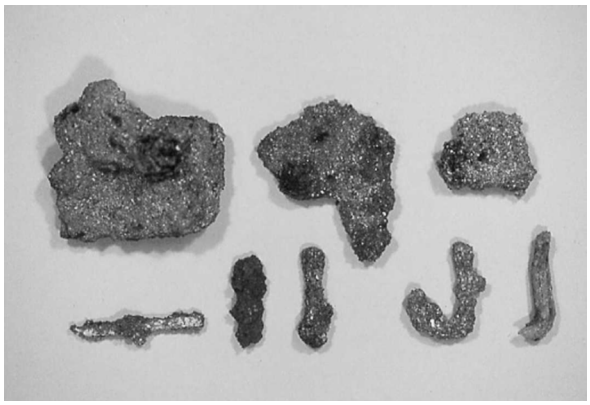


写真５　鉄器（第一次・第二次調査）

写真７　土器（第二次調査）

写真８　ヤコウガイ製貝匙未製品（第一次調査）

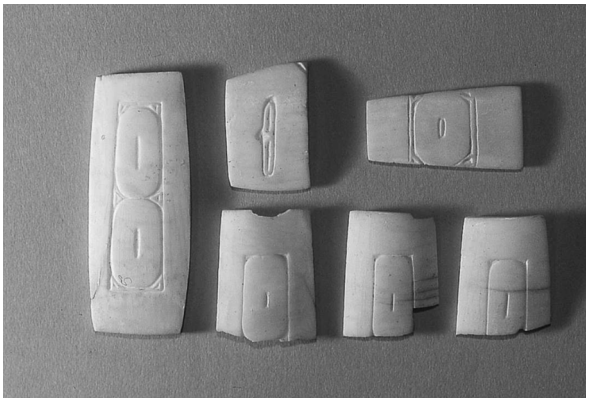


写真10　イモガイ製貝札（第一次調査）

写真９　ヤコウガイ製貝匙（第二次調査）

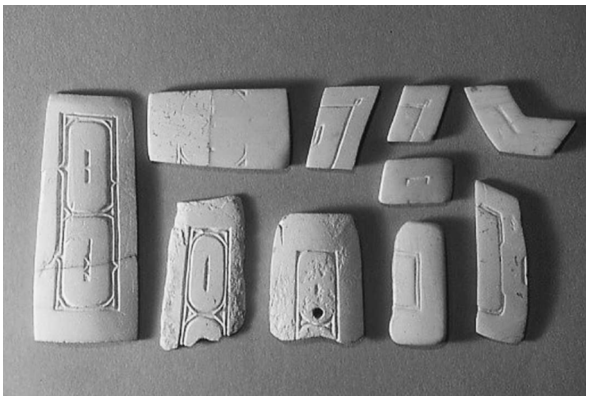


写真11　イモガイ製貝札（第二次調査）

続いて遺跡範囲確認の発掘調査であるが，2000（平成12）年の発掘調査（第四次調査）はトレンチ５箇所，2001（平成13）年の発掘調査（第六次調査）はトレンチ４箇所で調査を実施している。いずれも狭小なる調査面積であるため，確認されている遺構・遺物は多くない。

第四次調査は，第一次調査，第二次調査と同様の兼久式土器段階のヤコウガイ貝殻集積が確認されているほか，箱形石棺墓１基が発見されている。墓壙内に撹乱されており，人骨のほとんどが失われていた。しかし，副葬遺物として，200点を越える貝製小玉や若干のガラス製小玉が出土している。帰属年代は，兼久式土器段階，もしくはそれ以前の段階に位置づけられると考えられるが判然としない。

第六次調査は，12世紀後半～13世紀前半の良好なる遺跡包含層が確認されている。遺構は集石土坑を検出し，遺物は類須恵器，玉縁口縁白磁碗，滑石製石鍋，土師器，布目圧痕土器，滑石混人土器，鉄器，滑石製品等が出土している。またいわゆる「スセン當式土器」に類似した型式不詳土器を主体とした遺跡包含層が確認されている。当該箇所では，上層に兼久式土器包含層，さらに上層に類須恵器包含層も確認され，包含層の畳重が認められる事実は，きわめて重要である。おそらく古墳時代に位置づけられると考えられる。

特徴

小湊フワガネク遺跡群の発掘調査成果には，琉球弧（南西諸島）の考古学研究において重要と考えられるいくつかの課題が含まれている。

奄美諸島の在地土器として知られている兼久式土器は，帰属年代や型式細分等の研究が著しく停滞しているため，当該段階の考古学研究全般に重大なる支障を来たしていた。しかし，小湊フワガネク遺跡群の発掘調査により良好なる資料が多数獲得され，兼久式土器の古段階と考えられる資料は７世紀前後に位置づけられる結果が得られたため，帰属年代や型式細分等にひとつの見通しが確認されたと考えられる。今後の編年研究における重要資料として注意

写真12　ヤコウガイ製貝匙破片（第一次・第二次調査）

写真13　ヤコウガイ貝殻割り取り破片

写真15　ヤコウガイ製有孔製品（第一次・第二次調査）

写真14　割り取りが行われたヤコウガイ貝殻

される。

そして兼久式土器と広田遺跡上層型の貝札が共伴して出土した事実から，これまで弥生時代後期に位置づけられていた年代理解についても，再検討は必至であろう。

さらに，地中で腐りやすい鉄器が，兼久式土器段階で多数発見されているという事実から，相当に鉄器が普及していた可能性が考えられる。すなわち琉球弧の鉄器使用開始時期とされる12世紀という通説

写真16　滑石製石鍋破片

写真17　箱形石棺墓

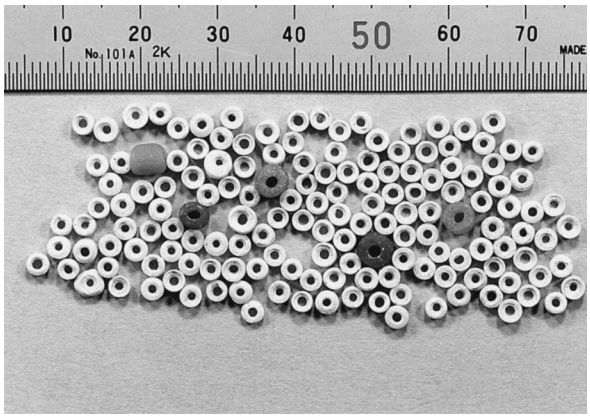


写真18　箱形石棺墓に副葬されていた貝柱

よりも著しく遡る段階から，少なくとも奄美諸島では鉄器を使用していたのではないかという疑いが強まりつつある。

また大量出土したヤコウガイ貝殻についても，貝匙製作跡が琉球弧（南西諸島）ではじめて確認され，製作技術をめぐる新しい情報が多数獲得されているほか，交易物資としてのヤコウガイ貝殻という新たなる課題の重要資料として，笠利町の土盛マツノト遺跡とともに注目されている。

資料の所在

出土遺物は，名瀬市教育委員会の名瀬市立奄美博物館に展示・保管されている。

参考文献

名瀬市教育委員会 1999「小湊フワガネク（外金久）遺跡―学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査概報―」『名瀬名瀬市文化財叢書』 2

（高梨　修）